
Julia

相羽わをん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

J u l i a

【Nコード】

N 8 9 2 3 W

【作者名】

相羽わをん

【あらすじ】

私、お嬢様っぽくないし??そう思うジュリアは、祖父の命令で山奥の古城を“調査”する事に。祖父の真意が見えないまま、古城へ向かったジュリア。そこには古めかしい貴族っぽい人たちが暮らしていて??.....。

<!>結構さつくり読める簡潔なストーリーです<!>

(以前個人サイトで公開していました)

お嬢様の出立（前書き）

この小説は想像の産物です。内容（出来事や物事人の名前）は現実と一切関係がありませんが、ムソルグスキー作曲の展覧会の絵は聞きました。素敵な曲です。

お嬢様の出立

ジュリアは扉を開けてバルコニーへ出た。眼下には白壁に緑の屋根の城下町。その向こう、右には世界有数の港、左には広大なレモンとオリーブの畑。人々の声に、カモメの声。爽やかな磯の香り。赤いメインマストの商船が、出航していくのが見える。

「もうすぐ夏ね。早く来年にならないかしら」

海風が吹いて、緩い金の巻き毛が揺れる。ジュリアはその髪を片耳にかけた。

「気が早いですよ、ジュリア様」

チェス盤を片付けながら、ジュリアの片腕とも言える青年が苦笑いした。黒髪に茶色の瞳は、昔からこの地に住んでいた人々の証。

「だって、早く学校に行きたいもの。入学直前で1年も休ませるなんて……。私がさんざんダンスとかパーティーとかすっばかしたから？ 私には貴族っぽい生活なんて向いてないのに」

「そんなことは」

「クラウディオ、嘘はいけないわ。私はこの国で一番おしとやかさが欠如してるわ。まったく、お嬢様じゃないわ！」

クラウディオはチェス盤をガラスのコレクションケースに入れた。ケースは猫足で、バラの彫刻、金細工の取手付き。趣味はとてもお嬢様らしい、とクラウディオは思っていたのだが。

「だって私、軍人になるのよ？ おじい様みたいに」

日差しが強い、首都リセーナ。日に焼けるはずが、ジュリアの肌は白い。ロウとまではいなくても、いわゆる深窓の令嬢生活を送る人々と比べても、色白だ。

「そうだ。おじい様に呼ばれてたんだった。行ってくるわね」

「いつてらっしゃいませ」

クラウディオは、いつものように一礼した。そして、動きにくいはずのドレスで軽やかに部屋を駆け抜けていく少女を見送るのだった。

た。

ジュリアの祖父、ルヴァント・ドゥナは、葉巻をふかしながら海軍の兵士に何か指示を出していた。ルヴァントの後ろには、クラウデオのような黒髪と、黒目の男が立っている。海軍の制服では無いけれど、部下の一人らしい。一通り何か喋った後、ルヴァントはジュリアの方を向いた。

「よく来たね。待っていたよ、ジュリア。少し見ない間にまた奇麗になったんじゃないか？」

「おじい様はお変わりなく」

ジュリアの部屋よりも幾分か暗い祖父の部屋にも、海の風は入ってくる。

「ジュリア、今日お前を呼んだのは、まぎれもなく命令があるからだ」

ジュリアは姿勢を正した。ハイヒールだが踵をそろえ、胸を張る。「明日から、ボラーゾフ山の中腹にあるディリストラ城を調査せよ。移動を含めて、一ヶ月やる。土産くらい持ち帰ってくるんだぞ」

「はい、おじい様」

笑って敬礼をする孫娘を、ルヴァントは満足そうに見つめている。そうそう、まだ彼女は自分の部下ではない。まだ。葉巻の煙はゆっくりと上っていた。

古城に住人

海に見える都から五日。薄暗い森、銀灰色の葉に、針葉樹。馬車は不安定な道のせいで激しく揺れた。

「まったく！ おじい様って本当に突然よね！」

その馬車の中で、ジュリアは頬を膨らませていた。動きやすいスラックスを許されたのには満足。だが、御者は送り迎えだけですぐにリセーナへ帰ってしまうという。自分は友達とのしばしの別れも許されなかったのに。

「調査つてのは名目だけで、ほとんど厄介払いよね。軽く幽閉よ！ デイリストラ城なんて、人里離れすぎて、地元の人も知らないって話じゃない！」

同じ馬車に乗っている、お供としてつけられたメイドのフィナは苦笑した。

「フィナ、あなたには可哀想な事をしたわ。一ヶ月間、新鮮な魚もレモンもオリーブも食べられないなんて」

「私の事なんて、気にしないでください。一番大変なのは、ジュリアお嬢様ですから。それに、オリーブなら塩漬けがあります」

両ほほのそばかすが愛らしいフィナは、初めての一人仕事に力が入っているようだった。なんだか微笑ましい。フィナはジュリアより5〜6歳下だから、ジュリアにとっては妹のような存在だった。

「それにジュリアお嬢様は、なんでも一人でできますから」
「そうね、野宿も得意だし」

フィナは水筒を取り出して、専用のゴブレットに注いでジュリアに渡した。

「今度私にも野草の事を教えてください」

「いいわよ。喜んで教えるわ」

ゴブレットから一口水を飲んで、ジュリアはぼつりとつぶやいた。
「野宿に野草……ほんっとお嬢様らしくないわね、私って」

城に着いたのは、ちょうどお昼頃だった。巨大な石の積まれた城壁は、おびただしい数の植物に這われて、緑の壁と化していた。このデイリストラ城は、ジュリアの家、ドウナ家の所有だと言う。

空は灰色、カラスの鳴き声も聞こえる。

鉄門扉に絡まったツタを切り落とそうとしたとき、扉はひとりで開いた。錆びて軋みながら、ゆっくりと。

「不気味ね。最近こんなホラー小説を読んだわ」

「脅かさないでくださいよ？」

ジュリアとフィナは顔を見合わせて、それぞれ荷物を持って、城壁の中へと入った。

城に着くまでのパッセージは、意外なほど歩きやすかった。草は刈ってあって、小さな花も咲いている。

あつという間に城に着いて、しかも、中へ入るのも容易だった。

城の中は、外の状態とは裏腹に、むしろ妙なくらい奇麗だった。調度品も明かりもタペストリーも品よく置かれていて、チリもホコリもない。当然のようにクモの巣もなし。

「誰かいるのかい？」

廊下の奥から男の声が聞こえた。誰だろうか。

「そちらこそ、どなた？」

「今そちらへ」

硬い音を鳴らしながら、長身の男が現れた。緩くウェーブのかかった長髪で、ジュリアと同じ金髪に蒼の瞳。古めかしいと言えば聞こえは良いけれど、少し流行遅れの貴族の服。だが、色々な人と会う機会があったジュリアにとっては、そんなに気になるものではなかった。

「ようこそ、城へ。私はアルベルト・ドウナ。あなたは？」

「私はジュリア・ドウナ。あなたもドウナ家の人なのね」

「亡き父の後を継いで、他の兄弟とともにこの城を守っているんだ」

「そうなの。使える部屋はある？ 祖父の命令でここへ20日間ほ

ど居なければならぬのだけど、迷惑ではない？」

「とんでもない、歓迎するよ」

内心、ジュリアは舌打ちした。せつかく帰れるチャンス……帰ろうと思えば歩いてでも帰ってやるつもりだったのに。

「案内しよう。昼食もすぐに用意させるよ。荷物を持とうか」

「ありがとう。でも……ああ、やっぱり任せるわ」

筋力トレーニングになるから、と言いそうになった自分を少し責めつつ、ジュリアは大きなトランクを手渡した。

ジュリアと姉妹

部屋は東向きの広い部屋だった。部屋の調度品はジュリアの趣味と近かったし、メイドの控え室もかなり広くて、フィナは感激していた。もしかしたら、首都リセーナの邸宅よりも扱いが良いかもしれない、と。

「この城で一番の部屋だよ」

「すごく素敵。いいのかしら、こんなに良い部屋で」

「もちろん。客人だからね」

アルベルトはトランクを置くと、出入り口を閉めた。

「ただし、この部屋は東向きだからね。朝は眩しいよ」

「大丈夫よ、むしろ嬉しいくらいだわ」

「昼食の準備をさせてくるよ。ここから動かないように。迷うからね」

白い歯を見せて、アルベルトは部屋を出て行った。

「いい人でよかったですね、ジュリアお嬢様」

「そうね、無愛想な人よりは、断然いいわ。フィナの部屋もあつて、上々よ」

ジュリアは、疲れた様子のフィナに微笑んだ。

「改めて、私はアルベルト。妹のシルヴィアと、アンナ。シルヴィアの一下下に、弟が一人いるんだけど、ちょっと今はこれらなくね」

昼食の席で、顔合わせ会みたいな事が始まった。

「シルヴィアです。趣味は編み物よ。どうぞよろしく」

「わたしはアンナ。好きなことは、お絵描き。よろしくね」

大きな楕円のテーブルに、ジュリアと向かい合わせるようにしてシルヴィアとアンナは座っている。

「私はジュリア・ドウナ。こちらはメイドのフィナ。どうぞよろし

く

「お姉さんは、このお城初めて？」

アンナが目をキラキラさせている。7〜8歳くらいかな。天使みたいな子、とはこういう子のことを言うのだと思う。

「ええ、はじめてよ」

「じゃあ、アンナが案内してあげる！」

「あんまり危ない所はだめよ」

シルヴィアが言うと、アンナは「ダイジョブだもん」と口を尖らせた。

「是非お願いしたいわ。散策は大好きよ」

小さい子と遊ぶと体力がつくのよね、と思ったのもある。でも、小さな子どもと遊ぶ機会がなかったから、折角だしという気持ちの方が強い。

「お姉さん、お昼ご飯食べたらね！」

天使の微笑みに、ジュリアは思わず微笑み返したのだった。

ジュリアは帰ってきて早々に、ベッドの上へと倒れ込んだ。

「やっぱり、小さい子の体力って凄いわ。城内をかけずり回ったけど、半端じゃない」

「お疲れさまです。お湯をもらってきましょうか」

フィナが、もう荷物をあらかた片付けていたのをみて、少し申し訳なくなつた。自分でも少しは片付けようと思っていたのに。

「大浴場があるってアンナが言っていたから、そっちに行ってみるわ。フィナも少し休んでちょうだい」

「はい。では着替えを用意します」

フィナは備え付けの衣装部屋へと入っていく。

「ほんつとに、ただの貴族のお城って感じね」

「リセーナのお屋敷も、貴族らしいと思いますけど……」

フィナが着替えを出してきた。白いシャツに濃紺のズボン。人が

住んでいるとは思っていなかったし、本当に荒れ果てた城をイメージしていたから、ドレスの一つも持って来なかった。

「じゃあ、行ってくるわ」

よっこらしよ、と起き上がって、ジュリアは着替えを片手に大浴場へと向かった。

大浴場に至るまでの廊下は、さながら美術館だった。大小さまざまな絵画や壺、置物、家具、ランプ、彫刻作品や胸像なんかが陳列されている。足下はふかふかの絨毯。頭上には天使と天文の天井画。やや状態の悪いものもある。

「やっぱり我が家は美術品との関係も薄っぺらいわね」

ジュリアは納得して、大浴場へつながる大きなガラスの扉を開けた。

「ジュリア！」

中には、すっかりジュリアと仲良くなったアンナがいた。さつき砂まみれになっていた髪の毛を洗っていた。どうやら使用人に手伝わってもらったことはなく、自分で洗うのが普通になっているらしい。

そもそも、この家には使用人がいるのかしら？

「ジュリアもお風呂？ わたしお風呂大好きなの」

「私も好きよ。手伝おうか？」

「ううん。自分でできるよ。あっちに白鳥がいるの」

「白鳥？」

鳥と入浴なんて、そんな馬鹿な。と、指差された方を見ると、確かに、大きな鳥の影が見える。

「アンナが作ったの。粘土で作って、焼いたの」

「あ、置物ね！ 生きてるかと思ったわ。凄く上手ね」

「えへへ。ありがとう」

アンナはにっこりと笑った。

「今度ジュリアのも作るね」

「ありがとう。でも裸婦像はやめてね」
「うん。分かった」

大浴場の中には置物の他に、見たこともない鮮やかな色の花や、葉の大きな植物が飾ってあった。湯船も4つあって、それぞれ違う形、違う装飾だった。ジュリアは置いてあった洗面器を持って、お湯をとり葡萄の彫刻で飾られた奥の方へと歩いていった。

ドレスと馬車

大浴場から戻り、髪の毛がほとんど乾いた頃、夕食の仕度ができたと声がかかった。

「あら、ドレスは？」

一緒に行きましようと思ってきたシルヴィアが、ジュリアの格好を見て目を丸くしていた。どうやらシャツにスラックスの格好は、移動用だと思っていたらしい。

「実は、こんなにもてなされるとは思っていなくて、持ってきていないんです」

申し訳ないというと、シルヴィアはジュリアの手を取った。

「私のドレスを着たら良いわ」

「そんな、私、シルヴィアさんほど細くないし……」

「シルヴィアで良いわ。大丈夫よ。良いドレスがあるから。折角なもの。ね？」

今に儂く消えてしまいそうな指で、ジュリアの手は包まれた。

「では、お言葉に甘えて」

本当は、ドレス着たくないんだけどな……。……。

シルヴィアはどちらかと言うと、スレンダーな美女だ。一方ジュリアはと言うと、メリハリのありすぎる体型だった。女らしさはあるものの、鍛え上げられた筋肉のせいで無骨さが漂う。ところが。

「ちょっとセクシーね。素敵よ」

と、シルヴィアは意に介さないようだ。断りようがない。

「恥ずかしい……」

「あら、女ばかりじゃない」

「あまりこういう格好はしなかったし、着慣れていなくて……」

「似合っているけれど？」

「あ、ありがとう」

歩きながら、延々と繰り返されるこの会話。

道を覚える余裕もなし。ジュリアはストールを肩からすっぽりかけて、できる限り露出を抑えようとしていた。

「ジュリアがドレス着てる！」

ブラウスにスカートをはいたアンナが駆け寄ってきた。ああ、私もあれくらいならまだ良かったのに。

「アンナもドレス着たかったのにー」

「じゃあ明日着ましようね」

シルヴィアが言っていると、アンナはハイと言って、ジュリアのドレスの裾をつかんだ。

食堂の木の扉が開く。中にはやっぱり少し古めかしい格好をしたアルベルトがいた。

「待っていたよ、夕食はできていたのに。なかなかこないから心配したよ」

「ごめんなさい、アルベルト。私がジュリアにドレスを選んでいたらものだから」

「私がドレスを持ってきていなかったのだから」

アルベルトがまじまじとジュリアを見た。ジュリアはやっぱり恥ずかしくなった。

やっぱり、一着くらい自分のドレスを持ってくるんだった。

「シルヴィアのドレスか。ちよつとサイズが違うんじゃないかい？」

「私としては、気にならないけれど」

と、シルヴィア。

「少し首の辺りが開き過ぎだ。奥の衣装部屋に、シルヴィアが着ないサイズの服がしまつてあつただろう。あれを出してきた方が良くないかな」

「そうね、そうするわ」

「それじゃあ、晚餐にしようか」

アルベルトが指差すテーブルには、すでに料理が運ばれてきてい

た。

「今日のジビエは野兎だよ。珍しくマスが捕れたからテリーヌにして、スープは早取りの空豆のクリーム風。ソルベは作ってないけれど、デザートがムースだから」

料理はアルベルトが作るんだろうか。ジュリアはつらつらと料理の単語が出てくるアルベルトを見た。こんな田舎だから、そんなに美味しいものは食べられないと思っていただけと……昼食のオーブンオムレツを思えば、凄く期待できる。

「南の方の料理が好きなの？」

ジュリアが尋ねると、アルベルトはまあね、と言った。

「やっぱり、これだけ寒くて厳しい土地にいるとね。南の方は楽園に思えるよ。いつか行ってみたいものだね」

席について、グラスに紅い食前酒。アンナはヤマブドウと書かれたポトルから、やや赤っぽいジュースを注いでいた。

「では、ジュリアの新しい生活に、乾杯！」

「ジュリア、一緒にお茶しよう。おいしいサブレがあるの」

「ジュリア、何か楽器はできる？ 前からこの曲をしたかったんだけど、共演者がいなくなってる」

「ジュリア、お散歩に行こう。今日は西の地下道を探検よ」

「ジュリア、シフォンケーキがあるの。一緒にいかが？」

「ジュリア、お絵描きしよう」

「ジュリア、レース編みは得意？ もしよかったら教えてほしいわ」

「ジュリア」

「ジュリア、ジュリア」

「ジュリア、ねえジュリアってば」

城に来て2週間。毎日が行事尽くし。

「疲れるわ。夢の中にまで、遊びのお誘いの声が響いてくる」

「おはようございます」

フィナが洗面器にぬるま湯を張って持ってきてくれた。ジュリアは顔を洗いながら、フィナを見た。旅の疲れはとれてこの城にもなれてきたと思っていたが、フィナの表情は明るくない。

「ジュリアお嬢様は人気者ですから。今日は皆さんお揃いでお出かけするそうだから」

「そう。久々に一人ね」

「ええ、それで……あの、昨日の夜更けに馬車が来まして」
どことなく暗いフィナの顔を、ジュリアは覗き込んだ。

「何か、悪い知らせでもあったの？」

「なぜか、私だけリセーナへ戻ってこいと」

「……変ね」

ジュリアはつぶやいた。フィナもうなずく。

「フィナ、出発はいつ？」

「もう一度馬車がこちらへ来るそうなので、そのときに」

「そう……おじい様がまた何か考えているのかしら」

「私、御者の方にそれとなく聞いてみます」

「そうね。多分、山の下で、足の速い馬に換えると思うわ。もし戻ってくるような確信が得られたら、そこで馬を借りて、戻ってきて」

「はい、そうします」

フィナはジュリアの服を置くと、窓の方へ歩み寄った。この部屋から昨日馬車が止まった場所が見えるようだ。

扉がノックされた。

「ジュリア、起きてるかい？」

アルベルトだ。下着姿を見られるのは、あのドレスよりも恥ずかしい。

「ええ。でも、まだ着替えていないから」

「そうか。じゃあ、扉越しで悪いけど。これから山の下の村へ話し合いにいつてくるから、城で留守をしておいてほしいんだ」

「分かったわ」

「くれぐれも、北の塔には入らないようにね。今度案内するから」

「ええ、楽しみにしてるわ。あとね、フィナがしばらくこの城を離れることになったわ」

「ああ、昨日来た馬車の御者に聞いたよ」

「知ってるならいいのだけど」

「フィナ、気をつけてね。じゃあ、私も行ってくるよ」

「お気をつけて」

「ありがとうございます。お気をつけて行ってらっしゃいませ」

足音が遠ざかる。扉越しの会話は終わった。フィナは不安そうにジュリアを見た。

「ジュリアお嬢様こそ、お気をつけて。こんな人里離れた古いお城ですから」

古城のシェフ

昼前に、フィナは馬車に乗って城を離れていった。シルヴィアとアンナはアルベルトと共に、フィナより先に城を離れている。本格的に一人になった。

「ゆつくり散歩ができるわ」

アンナとの散歩は、散歩というより追いかけてこたもの。

ジュリアは厨房へ向かった。おながが減ったけれど、昼食の準備がしてあるとは聞いていない。やっと覚えた食堂へ入ると、その裏側にある厨房へ入った。

人影が一つ。

「誰かいるの？」

もしかしたら、あのおいしい食事を作っているシェフかしら。

「人がいないのに人影ができるかよ」

柱の向こうから出てきたのは、つなぎを着た青年だった。

「物の影が人に見えることだってあるわ」

「あっそー」

青年はクリンクリンの金髪で、青い瞳。肌はよく日に焼けていた。つなぎに泥がついているから、野良作業でもしていたんだと思う。

ジュリアよりも背が低くて、いかにも生意気でいたずら好き、といった顔つきだ。

「あなたは誰？」

「あんたこそ誰だよ」

「私はこの城の滞在者よ」

「名前は」

「ジュリア。ジュリア・ドウナ」

「ドウナ？ コルドの？」

コルドはリセーナから少し離れた所にある、中規模な都市だ。コルドにはドウナ家の分家がある。

「いいえ、リセーナよ」

「へえ。リセーナか。行ってみたいね。リセーナってどんな感じだよ？」

「良い場所よ。大きな港町で。さあ、私は答えたわよ。あなたは誰よ」

「俺？ 俺に名前はないね」

青年は置いてあったリンゴを袖で拭き始めた。

「当ててみな。まー、他の奴にはシーズって呼ばれてる」

「ヒントはないの？」

「欲しかったら金貨一枚寄越すんだな」

シーズはリンゴにかじりついた。

「食材を勝手に食べて。あなたはここのシェフなの？」

「シェフ？ まあな。ここであなたが食べた野菜は全部俺が作って料理にした」

「ケーキやサブレは？」

「俺が作った」

ジュリアは面喰らった。こんな男の作る料理が、あんなに美味しくないなんて。詐欺だ。

「あなたは何しにこの城に来たんだ？」

「おじい様の命令よ。この城を調査するって名目で、一ヶ月滞在しるって。嫌になるわ」

「何に嫌になるんだ」

「名目って所よ。調査するなら、しっかりとしたかったのに」

シーズが、食べかけのリンゴを窓の外へ放り投げた。

「あつ。何してるのよ、可哀想なリンゴ」

「あんた、こついうのを気にするやつなんだな」

「そつよ。誰だって野宿で食料がなくなるってことを体験すれば思つよつになるわ」

にやっと、シーズが笑った。

「野宿？ ドウナ家のお嬢様がなんで野宿するんだ？ もしかして、没落でもしたのか？」

「去年の夏と冬、軍関連の総合予備校で特別演習に参加したの。どつちも2週間の野宿があるのよ」

「なんだ」

シーズが面白くなさそうに、ハムとチーズを取り出した。

「あんた、クロツクムツシユは好きか？」

「ええ、好きよ。作ってくれるの？」

「その代わりに、一曲弾いてもらおうと思ってね。シルヴィアのハープに合わせてヴァイオリン弾いてただろ？」

「交換条件ね。あなた、捻くれてるわ。明るく丁寧に、聞きたいって言われれば、断ったりはしないのに」

「そういうタチなんだよ」

と言うシーズの口調は楽しそうだった。

ヴァイオリンと舞踏会

弓が宙をきった。

「こんな曲、初めて弾いたわ」

一曲弾き終えて、ジュリアは満足そうに譜面から目を離した。

「まあまあだったと思うけど？」

「なんだか見慣れない記号や奏法も書いてあって、難しかったし」

「そりゃそうだろうな」

シーズは座っていた石段から腰を上げた。

ジュリアがヴァイオリンの腕を披露していた場所は、奇麗に手入れされた庭だ。バラやすみれやスズランが、季節に関係なく咲いている。奇妙でもあつたけれど、殺伐とした他の庭を思えば何倍も良い。他の窓から見える庭は、北の山だから暗い表情しか見せない。なぜこの庭は暖かいのだろうか。

「この庭は不思議な庭ね。暑くはないけれど、他の庭よりも暖かいわ」

「温泉が湧いてるからだ」

「温泉？ 良いわね、今度場所を教えてください」

「ただじゃ教えないね」

「交換条件？」

子どものいたずらのような、ささやかな楽しみ。日陰にいるシーズが、日向のジュリアを眩しそうに見た。

「気が向いたらな」

「何よ、ケチね」

「そんな挑発には乗らないぜ。また今度。俺は果樹園に行くから、あんたは早く城に戻れよ」

「もうすこし散歩をしていくわ」

「言うこと聞かねえ女だな。男みたいにごついし」

「男みたいで結構！ 私は私の行きたい所へ行くわ」

ジュリアはヴァイオリンをシーズに押し付けると、城の方へ向かってずんずん歩いていった。

ふわりと、懐かしい香りがした。

「……こんな所に、レモンの木が植えてあるなんて」

湿っぽい土、イバラに絡めとられてレモンの木が弱々しく立っていた。

「今度シーズに分けてもらおうかしら。レモンパイが食べたくなくなっちゃった」

夕食前に、アルベルト達三人は戻ってきた。その少し後、ざあざあど激しい雨が降り出した。

「これは長く降りそうだね」

アルベルトはそう言って夕食の卓についた。シルヴィアは少し具合が悪いらしく、部屋にこもってしまった。そのせいで止める者がいないため、アンナはずっと大好きなマツシュポテトばかり食べている。

「もうすぐ舞踏会があるのに。道が塞がねければいいんだけどね」

「アンナも行きたい！」

「アンナはもう少し背が高くなったらだね。パートナーも見つけなくてはならないし」

「舞踏会って、」

「山の向こうで開かれるんだ」

ジュリアの意を汲んだように、アルベルトは説明してくれた。

「ここは国境が曖昧だね。山の向こう側のルヴェンという城で毎年開かれている舞踏会に、今年も招かれたんだ。シルヴィアにいつも練習相手をしてもらっていたんだけど、体調がすぐれないらしいからね」

ゴブレットから水を口に含んで、アルベルトは残念そうに目を閉じた。

「シルヴィアの体調さえ良ければなあ」

「ジュリアは踊らないの？」

「私？ あんまり踊らないわね」

「でも、リセーナだとたくさんダンスパーティーあるんでしょ？」

「まあね。でも私はあんまり出席しないの。理由は秘密よ」

「なんで？」

「恥ずかしいから」

ジュリアは肩をすくめた。

ジュリアがダンスを人前で踊らない理由は、彼女にとっては深刻だった。ダンスの師範が言うには、ジュリアのダンスは出来すぎていて相手が大変、とのこと。背も高く、肩幅も広く、筋力のあるジュリアはどちらかというと男性パートの方が合っているらしい。

「アンナ、ポテトの他には食べないのかい」

「今日のは美味しくないんだもん」

「ジュリア、もうシーズには会ったかい？」

ジュリアは口に運ぼうとしていたサラダを、皿へと置いた。

「ええ。今日の昼くらいに。クロックムッシュを作ってもらったわ」

「へえ、そんなものも作れるのか。知らなかった」

「兄弟なのに？」

アルベルトは苦笑した。

「あいつについては知らないことの方が多いんだ」

ヴァイオリンと舞踏会（後書き）

ヴァイオリンはViolinですからヴァイオリンなのです、
うちよつとした主張……というわけではなく、気分です（、（

脅しの午後

夕食が終わって、部屋に戻る。フィナの姿はないし、少し寂しいなどジュリアは思った。マツチを擦って、ろうそくに火をつける。

「あぶないっていう意識がねえな。部屋の鍵くらい閉めるよ」

振り返ると、シーズが勝手に入ってきていた。

「ちょっと、勝手に入って来ないでよ」

「なんでだ？ 俺は凄く良い情報をあんたに持ってきてやったのに、ジュリアは口をへの字に曲げた。とつてもかんじ悪い。」

「交換条件があるんでしょ」

「当然」

「私がほしがっていない情報かもしれないのに、よくそう言うことが言えるわよね」

「分かるさ、顔に書いてある。『なぜフィナはリセーナへ戻ったんだらう？』」

窓の外が光った。遠くで雷の落ちた音がした。

「なんでフィナのことを知っているの？」

「秘密」

すらりと光ったのは、野良作業用のカマ。

「物騒な物持つてるわね」

「まあ、帰り道に寄ったからな」

悪びれることもなく、シーズはカマをくるくると弄んだ。十分な脅しだ。

「条件は何」

「明日の午前中は、自分の部屋にいることだ」

また、雷が鳴った。

「自分の部屋にただで良いのね」

「そう。扉には鍵をかけて、燭台で枷もかけとけば上々さ」

「分かったわ。じゃあなぜフィナは、セリーナへ戻ったの？」

「あんたを一人にするためだ。それ以外の何ものでもない」

ジュリアは手近な所にあつた壺を鷲掴みにした。

「それくらい分かるわよ！ 女だからつてなめてんの？」

「信用してないだけさ。あんたが約束を守って部屋の中にいるかどうか、その時になつてみないと分からないからな」

「疑り深いわね。友達無くすわよ」

「いいさ。俺に友達なんていない」

「寂しくないの？」

「こんな山奥に暮らしてるんだぜ？ 疎遠になるさ」

シーズはつなぎのポケットから、銅の鍵を取り出した。

「その本棚の鍵だ。暇なら読んでな」

「あら、ありがと」

鍵を渡すと、シーズはさつさと部屋を出て行ってしまった。挨拶もなし。

やっぱり友達無くすわね、とジュリアは思った。

この城へ来て、初めて一人で目覚める朝。フィナがいないと、やっぱり寂しい。外はまだ雨だ。

自分で水を汲んで顔を洗い、服を着る。

「ジュリア、起きてる？ 朝ご飯食べに行こう」

ジュリアは、ぴたりと動くのを止めた。アンナの声だ。

変に返事をしたりすると面倒なことになりそう。寝たふりしておこうかしら。

「ジュリア、ジュリア！ ねえ、起きてよお。朝ご飯食べに行こうよー！」

「ジュリア、そろそろ起きないと。具合でも悪いの？」

シルヴィアの声だ。集まってきてしまった。

「アンナ、ジュリアはまだ寝てるみたいよ。先に行きましょう」

「えーっ」

「我が仮言わない約束でしょう？」

「……うん」

足音と声が遠ざかってゆく。ジュリアはベッドにそつと腰をかけた。おなかは減っていない。水はあるし。

野宿よりはいい環境よね。

ジュリアはそう思つて、本棚へと近づいた。あの銅の鍵を使つて、扉を開ける。古めかしい本ばかり。背表紙が割れているのもある。手入れが悪いわ。

ジュリアは本を一冊手に取つた。題名は、デイリストラ城史書ⅤⅠⅠ。七代目のデイリストラ城主、ジェイミー・ドウナが書いたらしい。デイリストラ城史書は全部で26巻あつた。だが、XXVまでしか見当たらない。どこかおかしい。

「あ、XXが2冊ある……」

ジュリアは、デイリストラ城史書XXを二冊同時に引き抜いた。間には、紙切れが一枚入つていた。不気味な文字が紅いインクで書いてある。

「なにこれ。気持ち悪いわね」

ジュリアは思わずそれを破つて丸め、くずかごへと放り込んだ。

「おい、入るぞ」

振り返ると、シーズが勝手に入ってきていた。鍵をかけたと思つていたのに。

「あの三人は出かけた。もう昼過ぎだ」

「え？ もう？」

まだ朝起きてすぐの気分だつたのに。

「寝過ごしたんじゃないのか？ まあいいさ。約束は約束だ。教えにきた」

扉を閉めて、シーズはソファアの背もたれに座つた。

「なぜフィナはリセーナへ戻つたのか？」

ジュリアは固唾をのんだ。

「それは、あんたのおじい様の呼び出しがあつたから……じゃない」「お父様の、とか言わないわよね」

「よく聞けよ。あの馬車の御者は、リセーナの人間じゃない。あんなからフィナを引き離すためだけに現れた。フィナは今頃、ふもと
の村にいるだろうよ」

ジュリアはベッドから立ち上がった。冗談じゃない。もし本当なら、フィナは振り回されているだけじゃないの。

「なんでそんなことを知ってるのよ」

「御者と話をしたのさ。こんなとこまでご苦労だな、って」

「御者はどこの誰よ」

「それは言えねえな。約束だから。それよりもっと面白い話をしてやるよ」

ジュリアは枕を投げつけた。

「こついう時に面白い話なんて聞けないわよ！ もう！ フィナが、もしかしたら酷い目に遭ってるかもしれないって言うのに！」

「あんたのそれ、本心じゃないだろ？」

シーズがソファの背もたれから降りた。ジュリアの方へ歩いてくる。ベルト通しからぶら下げられた、鍵束が鳴る。

「独ぼつちになった自分が寂しいんだ」

「そんなことないわよ！」

「本当に？ 心の隅に、そのかけらもなく？」

「ないわ！」

「嘘だな」

両手首をつかまれて、仰向けにベッドに押し倒された。

「自分が可愛くない奴は、人間じゃない」

守れよ、乙女

額を額で押さえられた。頭突きもできない。ジュリアは噛み付いてやるうかと思っただ。

「睨むなよ、怖えな。『フィナを助けて』とか言っただけ泣き出すかと思っただのに」

「あなたが私の目の前から消え去って、フィナの無事が確実になるんだっただら、いくらでも泣いてやるわよ」

シーズは鼻で笑った。

「色気のかけらもねえな」

「上等よ。私は軍人になりたいの。軍人に色気なんて、普通は必要ないわ」

「上官にもかか？」

「あなたね！ 軍をなんだと思ってるのよ」

「人間の集まり。それ以外の何ものでもねえだろ？」
それもそうだ。

でも、聞いていることと根本的に違う！

「あなた人間じゃないわ」

「褒め言葉だな」

唇が触れた。

背筋が寒くなるのと同時に、顔が一気に熱くなる。

「！！！！」

「うっわ。ガッサガサだ。女なんだから顔の手入れくらいしろよ」

「余計なお世話よ！ 出てけ！ 人でなし！」

「うわー、こえー！」

ひらりとジュリアの右フック左アッパーを避け、一目散にドアへと駆けていく。

「拳骨で殴り掛かるなんて。もう少し女らしくしろよ。襲いがいがねえ」

「うるさい！ 出てってよ！」

ぱたんと扉が閉まって、ジュリアはへたへたと床に座り込んだ。

「もつ……。ボディーガードにクラウディオを連れてくるんだった……」

夕食のとき、まだ3人は帰ってきていなかった。雨は降り続けている。

ジュリアが卓につくと、シーズがさつきとは違う服を着てふらふらやってきた。

そうだ、この料理を作っているのはシーズなんだ。顔を合わせるのは嫌だったけれど、3食抜くのは健康に良くない。

「あんた、何食べる？」

厨房へ入ってから、シーズが大声で尋ねてくる。

「レモンパイ」

ジュリアは不機嫌な声で答えた。

「作り置きがねえよ、そんなもん」

「じゃあ夕飯はいらないわ」

「朝昼晩抜きか。過酷だな、明日の朝も三人はいないはずだぜ」

ジュリアは厨房の方を睨みつけた。

牽制しておかなければ。

「あなたは何を食べるの」

「俺？ 野菜」

シーズは厨房から湯気の立つ皿を持ってきた。テーブルの上に置かれたのは、温野菜サラダ。ミモザ風にしてある。

「野菜があれば、あとはいらさないさ」

「意外だわ。肉食だと思っていたのに」

「俺は欲深くないからな」

そう言っつて、にんじんをほおばった。

「嘘だわ。絶対になにかあるわよ」

「そう言うあんたは？ 何を望む？」

「そうね、私を災いから守り抜いてほしいって願うわ。あんたみたいな男からもね」

シーズはジャガイモをつぶしながら、乾いた笑い声を上げた。

「悪魔が願いを叶えるって言っても、その願いなのか？」

「そうね。私を災いから守り抜くつてのは、外せないわね。相当難しいはずだけれど」

ジュリアも野菜を自分のさらに取り分けた。

「俺が悪魔なら、あんたにこう対価を要求する。『他の男と寝るなよ』って」

「あなた、頭の中がおかしいんじゃない？」

「楽しんでるだけさ」

いい加減なシーズの言葉に、ジュリアはインゲンを刺したフォークを、皿の上に乱雑に置いた。あきれた。遊んでるんだわ、きつと。表情が楽しそうなもの。

目が輝いているシーズは、フォークを指揮棒みたいに振り回した。

「ほら、歌劇フィーゴ公爵の1幕みたいだろ？ 台詞を言い換えて

みるよ。『お前の望みは何だ』」

「……『私を災いから守り抜くことだ』えーつと、『それがかなう

ならば何でもしよう』」

「『本当だな』」

「『本当さ』」

「『ならば、俺の言うことを聞くことだ』」

「『ひとつだけなら』」

「『ああ、ひとつだけ』」

「『わかった、ならば従おう』」

「『他の男と寝るべからず』」

「『ああ、いいだろう。私の願いが叶うならば、悪魔よ』……って、

私男役じゃない。しかもフィーゴ公爵が男色家みたいだわ」

「それを狙ったんだけど」

ジュリアは肩を落としたり。

「あなた、木の枝で頭打ったでしょう」

「さあね？ 俺の食事は終わった。じゃーな」

「当分顔を見なくていいわ。おやすみなさい」

「鍵かけて寝るよー」

ボタン

ジュリアは独ぼっちの食卓で、湯気のおさまった温野菜サラダを黙々と食べた。雨はまだ止まない。

翌日の早朝、ジュリアは息苦しくて目が覚めた。寝返りを打ちながら、大きく息を吸う。重たいわね。なによ、この温かい……。

まさか。

昨日はちゃんと鍵をかけた……、その記憶がない。かけ忘れた！
冷や汗が吹き出る。

ジュリアはおそるおそる、後ろを振り返った。

ダンスへの誘い

「なんだ、アンナだったの……」

「おはよう、ジュリア。昨日はどうしたの？」

アンナが白い歯を見せて笑う。柔らかそうなセミロングの金髪を指先でいじっている。

「昨日はちよつと寝過ごしちゃって」

「ふーん。ね、朝ご飯食べにいこうよ」

「そうね」

と言つて、ベッドから降りた。いすの背もたれに引っ掛けてあつた、シャツとズボンを適当に着る。なんだか気だるい。

「アンナは何着るの？ 私の部屋にアンナの服は置いてないわよ？」

「アンナ、このままでいいよ。お部屋までもどるの、大変だもん」
薄いナイトドレスを指差した。

「寒くない？」

「大丈夫！ アンナ平気だもん」

アンナはベッドから飛び降りると、部屋の中をくるくる走り回つた。ジュリアが着替え終わったのを見て、アンナはカーテンを開けた。

「あっ！」

「何これ、この足跡……」

外から入ってくる光で、初めて気がついた。

部屋のカーペットの至る所に、泥のついた靴で歩いた跡がある。

同じ所を行ったり来たりしているようだし、すれたりカーペットに滲んでいて、足の大きさも分からない。

「アンナ、アンナが来た時に、この足跡はあつた？」

「ううん。なかったよ」

「そう。ありがとう。後で掃除しなきゃ」

掃除道具くらい、あるわよね。

ジュリアはアンナと手をつないで、食堂へと向かった。

「ジュリア、今日の午後、ダンスの練習につきあってももらえるかい？」

ジュリアはフォークからスクランブルエッグを落としてしまった。

「ダンス？ ああ、あの、舞踏会の？」

「ああ。シルヴィアの体調が一向に良くならなくてね」

アルベルトは残念そうにフォークを置いた。

「もし迷惑じゃなければ、テンポの速い曲の練習したいんだ」

「でも、私そんなにうまくないし……」

ジュリアはほろが引きつった気がした。アルベルトは背が高いけれど、ジュリアとでは背が釣り合わない。

「教えてくれて言う訳じゃない。体を慣らしておきたいんだ。1、2曲でいいから」

「分かったわ。少しだけなら」

「ありがとう」

アルベルトが白い歯を見せて笑った。綺麗な歯だ。

「じゃあ、今日の午後4時に、北の大広間で待ってるよ」

アンナのお誘いを断って、ジュリアは部屋に戻った。正直、ダンスの練習は気が重いから、行く前に休みたかった。なのに、ジュリアの部屋にはシューズがいた。

「アルベルトとダンスの練習？ へえ、もうそんなに仲が良いんだな」

「うるさいわね、出てってよ。ダンスなんて、気が重いよ。私、休みたいの」

ジュリアはどきつとソファーに倒れ込んだ。

ダンスなんて、練習以外で踊ったのはいつ？

舞踏会なんて、ここ3、4シーズン連続欠席よ。なまっているこ

と確実なのに……。

「アルベルトの奴、何者だと思っ？」

「知らないわ。この城に住んでる私の親戚でしょう」

シーズは面白くないといった表情で近づいた。腰にはナタがぶら下がっている。

「違う。俺は親切だから教えてやるけど、アルベルトは普通の人間じゃない」

「そうね、ちょっと古風よね。格好とか」

「アルベルトと踊るなら短調の曲はやめておけよ」

「ふーん」

「……お前な、」

「はいはい。ご忠告ありがとうございます。私、休みたいのよ。さっさと出てっ」

ほとんど話を聞いていないジュリアに、シーズはむっとした様子で鼻の下をこすると、一層不機嫌な表情で出口へと向かった。そして出て行いきざまに、無理矢理口の端を上げたいびつな笑顔で、ジュリアに向かって叫んだ。

「まったく！ これだから世間知らずのオジョーサマは！」

「うるさいっ！」

ジュリアが投げつけたクッションは、扉の手前で力なく床に落下した。

緋色の円舞曲

蓄音機から流れてくる軽やかで軽快なワルツが終わり、ジュリアは髪に手をやりながらアルベルトから離れた。うつすら汗をかいていたし、1、2曲という約束だ。さつさと借り物のドレスから着替えて、自分のシャツとスラックスを着たい。

「十分上手だと思うわ。リセーナでも、ここまで正確に踊ってくれる人はいないんじゃないかしら」

ジュリアは疲れた笑顔でアルベルトに言った。とりあえず、今日は夕飯を食べてさつさと寝たい。シーズの発言に腹が立っていたし、その後にアンナの探検につきあわされていたからもうくたくただった。

「そうかい？ 嬉しいね」

いつものように、アルベルトは白い歯を見せて笑った。

「だけど、疲れたわ。久しぶりに踊ったから、息も上がったし」

「そう？ でも最後にスローテンポを一曲、お願いできるかな」

そつとジュリアの手を取ると、やわらかな物腰でジュリアの顔を覗き込んだ。ジュリアは無理矢理笑顔を作った。

「どうしても？」

「ああ。ジュリアはあと数日しかここに居ないからね」

「……そうね。分かったわ」

もう一曲だけ踊ったら、さつさと厨房へ行つてハム的一块でもかっぱらつて……いえ、いただいで、さつさと寝室にこもってしまおう。どうせここに滞在するのもあと1週間だもの。

「一曲だけなら」

「ありがとっ、ジュリア」

アルベルトはふわりとジュリアのもとを離れると、盤を取り替え始めた。回転する盤の溝に、針をそつとのせる。

急ぎ足でジュリアの所へ戻ってきた。ちょうど良く、穏やかな調

べが流れ出す。

二人はそれぞれ礼をした。

さっと手を取って、踊り始める。

緩やかで優しい表情の曲とは裏腹に、窓には激しく雨がぶつかつてきていた。昼間とは思えない重苦しい空。荒れた山に生える枯れ木が見える。降る雨は大降りで、時折遠くで雷が鳴った。

白い光が窓から部屋を突き刺して、地響きのような雷鳴が部屋を揺らした。

突然、曲が変わった。

振動で針が飛んだのだろうか。

重苦しい低音の旋律。幽玄なヴァイオリンが現れ、薄らいで消える。不気味で暗い円舞曲。

「踊り続けよう」

アルベルトが耳元で囁いてきた。

嫌だと言おう。もう疲れたから、と。

だが、ジュリアは口を開くことができなかった。足はステップを踏み続け、視界の端の景色は回る。アルベルトの服から香る少し古めかしい匂いが、息を詰まらせる。

「折角、ジュリアのように踊るのが上手な人と出会えたんだ」

アルベルトは歯を見せて笑った。

「こんなに上手な人と踊ったのは、100年ぶりくらいかな」

ジュリアは思わず目を見開いた。100年ぶり？ どういうこと

？ アルベルトは100年より長く生きてるってこと……？

「それに」

腰から手を離してジュリアをターンさせ、そのまま腕の中に抱き寄せた。

「これだけ血が豊かな女性も、久々だね」

ジュリアの首筋に、柔らかくてざらつとした、生温かなものが触れた。汗で冷たくなっていた背中が、ざわめいた。

「美味しくいただかせてもらおうよ、ジュリア」

アルベルトは金髪を揺らして、白い歯を見せて笑った。形の綺麗な八重歯が、ジュリアの視界の端に見えた。

気がつくくと、ジュリアは見知らぬ部屋のベッドの上に横たわっていた。周りを見渡せば、随分と時代遅れな、よくいえば古風な家具やカーテンでかためられている。この部屋の主は、もしかして……。首に、あの嫌な感触が残っている。気持ち悪い。

あの時どうして体が自由に動かなかったの？

まるで自分の意志と関係なく、踊り続けて……。

「やっぱり似合うね」

アルベルト！

声のする方を見るが、体がほとんど動かない。口も動かないし、声も出ない。目だけを動かして見ていた。

「肌が白いと、黒が一層引き立つ」

ベッドに広がる服の裾に目をやる。いつの間にかジュリアは、踊っていたときのドレスではないワンピースを着ていた。袖からしても、やっぱり古めかしいデザインで、流行とは無縁な雰囲気。

「黒が似合うなら、赤も似合うはずだよね」

アルベルトが、ベッドに腰をかけた。古いベッドが嫌な音を立てる。投げ出されたジュリアの腕を持ち上げると、鋭利な爪の先で白い肌を裂いた。

「綺麗な赤だ」

静かに滲み出たそれを、そっと口にする。

「ああ、美味しい」

ジュリアの首筋から顎に、手を滑らせた。アルベルトは夢を見ているような目で、ジュリアを見ていた。

「良かったよ、ジュリアの首を食まなくて。首を食めば、たった一度きりしかこの赤色を味わえない」

また、ジュリアの腕の赤色を口に入れた。

「こうしていれば、当分の間、飢えずに済む。ジュリア、もし足りなくなつて、苦しくなつたら教えるんだよ。その時は、楽にしてあげるから」

人間なら、本当にただの変態だ。

ジュリアは腕の痺れるような痛さに、のどの奥でうめき声が出そうだった。でも声なんてだせない。痛くて不快で、涙だけが出る。

「ジュリア？ どうしたんだい、そんなに嬉しい？」

嬉しくなんかない！

こんな奴と、会おうんじやなかった！

「君が嬉しいと、私も嬉しいよ」

アルベルトはベッドの上へ上がると、ジュリアの肩を抱いて起き上がった。

「その……もしジュリアが良いのなら、なんだけど……私の、その、花嫁になつてくれないかい？」

はにかむな！ 気色悪い！

「私の花嫁になつてくれたら、君を不老の体にしてあげられる。血が不足することのない体だ。不老だけを望むなら、それでもいいけれど……。もし愛の結晶が出来たなら、そういう訳にもいかない……だろう？」

動かないはずの全身に、一瞬にして鳥肌が立った。

何考えてるのよ、この変態は！

ああ、もう、誰でも良いから助けて！

助けられるのは好きじゃないけど、もうこの状況どうしようもない。おじい様でもお父様でも、フィナでもクラウディオでも、いつそのことシーズでも良いから！

誰か！

この状況をどうにかして！

「あんたの願いは？」

遠くで、別な声が聞こえた。

「ジユリア……！ 今、頷いてくれたね！」

アルベルトの目が輝いた。

気のせいよ！ 体が動かないのに頷けるはずがない。なのに、勘違いの希望に目を輝かせたアルベルトの顔が、見る見るうちに近づいてくる。

ああ、このままいくと！

「あんたの願いは何だ？」

また声が聞こえた。

私の願い！？ 私の願いは、私が一生男に負けず劣らず、無敵であり続けることよ！ 心の中で叫ぶ。

「え、そうなのか？」

そうよ！

「えー、あー、じゃあ、対価にお前の心臓を貰っていくぜ」
心臓！？ 死なないの！？

「ああ」

健康体のままよね！？

「もちろんだ。のめるか？」

良いわ。その条件、のんでやるわよ！

そう答えた瞬間。

フツと、体が軽くなった。

古城の主

妙なうめき声を上げて、アルベルトはベッドの柱に激突した。白目をむいて気絶している。

「すごいな。足蹴りだけで、こいつを気絶させるなんて」

感心したという表情で、シーズがベッドに近づいてくる。

「あんた見てたの！？ 私のこと助けなさいよ！」

「助けただろ。体が動くようにしてやったし」

シーズは泥で汚れたつなぎのまま、アルベルトを担いで運びソファーに転がした。シーズはアルベルトより背が小さかったけれど、軽々と運んでいた。野良仕事で鍛えられているんだらうか。

「さて、ジュリア・ドウナ」

シーズが、ベッドに座ったままのジュリアに近づいてきた。思わずジュリアは身構える。

「さっきのは仮契約だ。本当に俺と契約するか？ 俺は嘘はつかないぜ。本当にあんたの願いを叶えてやる」

楽しそうに、シーズは笑う。

「『一生無敵』なんて、叶えてやれるのは俺くらいだ」

「あなた、アルベルト達とも契約をしているんじゃないの」

ジュリアは気絶しているアルベルトをちらっと見た。まだ起きてくる様子はない。

カラカラと乾いた声でシーズが笑った。髪をかきあげながら、ジュリアに背を向けて離れて行く。

「俺はドウナ家の人間以外と、契約しない」

振り返った。

クリンクリンの金髪が、たちまち針のような白髪になった。白目は青白く、瞳は赤く変わる。日に焼けた肌を、手で剥ぎ取った。ジュリアと同じくらい、白い肌。

「アルベルト達は、ドウナ家の人間じゃないの」

「ああ。城にコソコソ住み着いている吸血鬼さ。人が来ると俺を弟として紹介してるだけで」

「なるほどね」

もう、ジュリアは驚かなかった。こんな人里離れた不気味な城に居るくらいだ、どんな化け物であってもおかしくない。

「あなたは？ あなたは何者よ」

ジュリアはベッドから降りて、真っ正面からシーズを見た。

一定の距離を置いて、二人とも動かない。

ややあつて、シーズが動いた。

「知りたいか？」

ゆっくりと、ジュリアの方に近づいてくる。

「もう薄々気付いてるだろう？」

ひんやりと冷たいものが、ジュリアの首に触れた。よく研がれた、

野良作業用のナタ。

シーズが、まるでジュリアを睨みつけるようにして、笑った。

「俺は悪魔。そして、この城の主だ」

契約の泉

「さあ、俺と契約するか、しないか。契約するなら、今からあなたを殺すのをやめてやるよ」

シーズはジュリアの首筋で、ナタの刃を滑らせる。さりさりと、産毛が切られる音がした。

「ちよっと、うっかり髪の毛が切れたらどうするのよ」
思わずジュリアは声を上げた。

「どんな女の子だって、髪の毛は特別大事にしてるのよ」

「軍人でもか？」

「ええ。軍人に必要なくても、作戦には必要かもしれないわ」

「へえ。そんなもんか。で、どうする？」

楽しそうなカオ。微妙にイラツとする。

ジュリアは思った。

今こんなことで死ぬ必要はないでしょう。

悪魔と契約をしたって、契約書を破れば契約は破棄されるわ。

それに、私は軍人になるのよ。『一生無敵』、素敵じゃない。

「いいわ。あなたと契約する」

シーズは、ジュリアの首からナタを離した。

「そうくると思ってたぜ」

嬉しそくにナタを腰にぶら下げると、ぶつぶつと何かつぶやいた。
足下に、光の模様が浮かび上がる。

「……魔法陣……？」

「そつだ。女子が大好きなオマジナイにも出てくるだろ」

シーズの声が聞こえた。姿が見えない。

足下が、ざわつとつごめいた。

「!？」

周りの景色が違う。

部屋の中じゃない。

ジュリアは、森の中の小さな泉の前に立っていた。

「契約するなら、その泉の中に入れよ。服は着たままで良い」

上の方からシーズの声がする。泉からは湯気が立つ。前に言っていた温泉のことだろうか。

「これ温泉？」

「ああ、そうだ」

「服のまま入ったら、ぬれるわ。帰りはどうするの」

「それくらい一瞬で乾かしてやるよ。生きるか死ぬかなのに、そんなこと気にしてんのか、あんた」

悪かったわね、とは口にしなかった。

やっぱりイラツとする。

「さつさと入れよ」

ジュリアは泉に背を向けて歩き出した。

「え、ちょ……契約はどうすんだよ、おい!!」

「契約？」

ジュリアは泉の方を振り返った。

「あんなに美味しい契約なもの」

裾を持ち上げると、自慢の俊足で走り出す。

「するに決まってるでしょ!!」

泉の手前で踏み切る。黒い影が宙を舞い、泉がしぶきを上げる。

「飛び込むかよ、フツー……」

あきれたシーズの声が、波紋の広がる泉の上に響いていた。

泉の中は、驚くほど綺麗だった。

上を見上げれば、日の光が揺らめいて、水草は優雅に水の流れに身を任せ、ジュリアの息は大きな真珠のように、上へと昇ってゆく。

綺麗。

体を動かしたくない。

このあたたかさの中に、ずっとずっと身を置いていたい。

動かさなければ沈んでしまう。

どうしようか。

ジュリアは抗いもせず、ただあるがまま、泉の底へと沈んでいった。

彼女と彼の契約

目が覚めると、見慣れた天蓋があった。

海の香りと、大好きなレモンパイの香り。親しい人達の声。

「ジュリアお嬢様！ ジュリアお嬢様がお目覚めに！」

嬉しそうなフィナの声。

薄らぼんやりとした視界に、ちよつと懐かしい、黒髪と茶色の瞳が入ってきた。

「ジュリア様」

「……クラウディオ？」

優しい、いつもの微笑みがあった。

「ここは、リセーナ？」

寝たままで見える範囲に、ジュリアが自分の趣味で集めた品々が見える。自分の部屋だ。間違いない。

「はい。ジュリア様が眠られている間に、デイリストラ城から馬車で」

「そう……フィナは無事なのね」

自分の額に手をやって、目を閉じる。フィナがはい、と返事をした。

「城へ戻れなくて、すみませんでした。馬車に乗ってデイリストラ城を出た後、山のふもとの村で馬車から降ろされ、馬車は行方知れずになりました。雨が降り出して、山へ行くなら馬は貸さないと村人から言われてしまつて……ですから、コルドのドウナ家まで戻つて、そこから早馬を出していただいたんです」

コルドは、首都リセーナとデイリストラ城の建つボラーゾフ山の間にある中都市だ。コルドにはドウナ家の分家がある。

「フィナ」

ジュリアは目を開けて、微笑んだ。

「ありがとう。初仕事なのに、よくやったわね」

「ありがとうございます」

フィナは、いつものように、優雅にお辞儀をした。そう、いつものように。

ノックもなしに、扉が開いた。

「ジュリア、無事だったようだな」

入ってきた人物を見て、部屋中の人が頭を垂れた。クラウディオとフィナも、ベッドから離れた。

ジュリアだけは軽くお辞儀をして、その人を見て微笑んでみせた。

「はい、おじい様」

祖父ルヴァントはゆっくりと、杖をつきながらジュリアのベッドサイドに置いてあった椅子に座った。

「心配したぞ、コルドからの早馬がついたと聞いて、まさかと思っ
た」

ルヴァントは、老齡にしては奇麗に揃った歯を見せて笑った。ルヴァントの後ろに控えていた黒髪が、周囲に向かって短く命じた。

「人払いを」

人々は慌てて出て行く。

あつという間に、部屋の中はジュリアとルヴァント、黒髪の男だけになった。

「だがお前が成功してよかった。お前は無事に、契約を結んだな」

「はい、まだ自覚はありませんが……」

「そのうち自覚も湧くさ」

聞き覚えのある、イラツとする声が聞こえた。

振り返ると、泥だらけのつなぎを着た、シーズが居た。初めてあった時と同じで、髪の毛はクリンクリンの金髪、瞳も青色。肌は日に焼け、少しそばかすも見える。

ルヴァントやその後ろの黒髪も驚くことはなく、ただシーズのことをまじまじと見ただけだった。

「お前のことは、なんと呼べば良いかな、悪魔」

「ジュリアは俺をシーズと呼んだぜ」

鍛えられた体を揺らして、ルヴァントは笑った。今までに聞いたことのない、大きな笑い声だった。

「ではシーズ、お前、契約書はどこに仕舞った？」

「人はかつて、翼を持っていた」

シーズが、ルヴァントに近づいてゆく。ジュリアは、腹の底がひやりとした。

「翼を失う古の契約と同じさ」

「ほう、ハルヴァーの契約だな。つまり、2枚の契約書……保険か。用心深い悪魔だ。良い悪魔と契約したな、ジュリア」

ルヴァントはジュリアの頭を撫でた。ものすごく、久しぶりだった。いつもならほめられるのは、嬉しいと感じるけれど……。間接的にもシーズがほめられていると思うと、気分よく喜べない。それに、良い悪魔ってなによ。

「俺は久々のリセーナだ。どんなことが起きるのか、楽しみにしているぜ」

本当に楽しそうな顔をして、シーズはジュリアの横に浮かんだ。

宙に、ふわりと。

「連れてきてくれて、ありがとよ。よろしくな、オジヨーサマ！」

「……ええ、よろしく」

ジュリアの頬が、一層引きつったのは、言うまでもない。

こうしてジュリアは悪魔と契約した通り、ある意味では無敵となつて日々の生活へと戻ったのでした。

そのお話は、また別の機会に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8923w/>

Julia

2011年10月12日08時57分発行